

「年寄りには仙人のような境地で、すっかり枯れているに違いない」。そう思っている人がいます。私も若いころはそうでした。しかし自分が高齢者になり、後期高齢者を近くで見るにつけ、これは完璧な誤解だと自信を持って断言できるようになりました。

川端康成に『眠れるる美女』という名作があります。六十七歳の老人が、眠った裸の美女と添い寝をする秘密クラブに入会し、何人もの女性とベッドを共にします。老人の若い女体への憧れや亡き母への思いなどが重なり、人間の心理の奥底が描かれますが、エロチック文体に多くの人が惹かれることでしょう。六十歳を過ぎて発表された作品ですが、性的な執着がなまめかしく表現されています。

これから、私は明日できることは明日に延ばし、早く終わらせようとしなくて、できるだけ引き延ばしてそのことを楽しみたい、ゆっくりと時間を味わいたいと思っています。人生はほどほどでいいのです。明日できることをきょうやってしまったら、明日の楽しみがなくなってしまう。

いい人であろうとする人は、言ってみれば他人の言いなりになるということです。自分の意見を持たず、それを口に出せず、誰かに従い、その指示に従うということです。それは、相手に振り回されるということでもあります。本人にはそのようなつもりはなくて、単に平和でいただけなのでしょうが、結局はそのようになってしまいます。つまりは、「自分を持たない、他人の追従者」です。

私の母は、そのような人物の典型でした。誰にも反対できず、父や父の家族の意思にそのまま従って、**周囲のみんなの役に立つことを考えて生きてきた**ようです。その考えが今も抜けずに、多くの人にいい顔をして、賛成しようとします。

これまでもお伝えした通り、九十一歳になる私の母は老人ホームで暮らしています。口癖のように「こんなことをするわけにはいかん」「そんなことをすると、悪かろう」と言いながら、老人ホームのスタッフの方やほかの入居者に気をつかい、**自分のしたいことを我慢**しています。

マッサージを受けている時、「強すぎるのももう少しソフトにしてほしい」とも言えず、着替えをしている時、「寒がりなのでもう少し厚地の服にしてほしい」とも言えずに、スタッフが用意してくれた服を出され、「この服でいいですか」と聞かれて、にこにこしながら「いいです」などと答えています。

私は二〇〇九年からブログを書いています。内容のほとんどがコンサートやオペラ、映画の感想です。旅行に出た時には、その場所の印象などを書きつけます。

私は書くことはとても大事な作業だと思っています。コンサートを聴いただけですと、その時の印象はそのうちに消えてしまいます。どんなコンサートに行ったのかさえも忘れてしまいますし、そもそも印象そのものがはっきりしません。

家に帰って、パソコンに向かい、音楽を聴いた時の自分の気持ちを思い出し、その日の演奏を思い出すうちに、感想がはっきりしたものになります。そして、自分自身にとっての備忘録になります。私は自分がこれまでどんなコンサートを聴き、どんな感想を持ったか、自分のブログを読み返して確認しています。